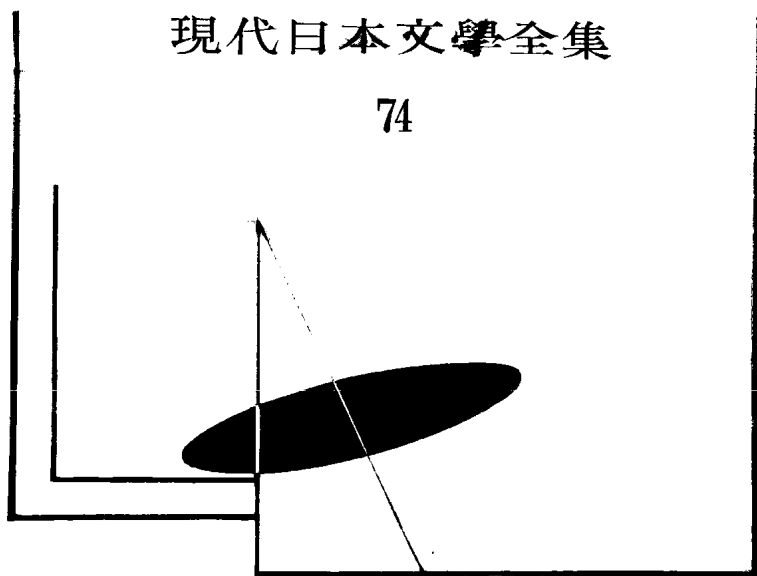




阿部次郎 倉田百三 集

現代日本文學全集

74



筑摩書房版

阿部次郎
倉田百三集

昭和三十一年八月一日 印刷
昭和三十一年八月五日 發行

著者

阿部次郎
倉田百三

發行者

古田晁

印刷者

山田一雄

發行所

筑摩書房

〔電話〕東京一九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

整版株式會社
印刷株式會社
製本矢島製本所
精興社

阿部次郎集 目次

三太郎の日記(第二)	五
徳川時代の藝術と社會(前編)	五九
ダンテの「神曲」と ニイチエの「ツアラツストラ」	一六
早春の賦	二七
蝦と蟹	三七
静寂	三九
雑草	四九
ルツェルンの春	四一
吹雪の話	五一
西郷隆盛の話	五四
最上河	五八
秋思	六三

倉田百三集 目次

歌はぬ人	一九
出家とその弟子	一八六
俊 寛	二六四
愛と認識との出發	二九二
阿部次郎論（岡崎義恵）	三九九
倉田百三（亀井勝一郎）	四〇七
解説	四一七
年譜	四二三

装幀 恩地孝四郎

阿部次郎集

壬午元旦
病後階上

初空を透すや
朽の枝嫩く

次郎

三太郎の日記 第一

Es irrt der Mensch,
solang er strebt.

自序

此類の書は序文なしに出版せらる可き性質のものではない。自分は自分の過去のために、小さい墓を建ててやるやうな心持で此書を編輯した。自分は自分の心から愛し且つ心から憎んでゐる過去のために墓誌を書いてやりたい心持で一杯になつてゐる。

此書に集めた數十篇の文章は明治四十一年から大正三年正月に至るまで、凡そ六年間に亘る自分の内面生活の最も直接な記録である。之を内容的に云へば、舊著「影と聲」の後を承けた彷徨の時代から——人生と自己とに對して素様な信頼を失つた疑惑の時代から、少しく此信頼を恢復し得るやうになつた今日に至るまでの、小さい開展の記録である。自分は自分の悲哀から、憂愁から、希望から、失望から、自信から、羞恥から、憤激から、愛から、寂寥から、苦痛から促されて此等の文章を書いた。全體を通じて

て殆んど斷翰零墨のみであるが、如何なる斷翰零墨もその時々内生の思出を伴つてゐないものはない。固より外面的に見れば、此等の文章の殆んど凡ては最も平俗な意味に於ける何等かの社會的動機に動かされて書いたものである。經濟上の必要や、友人の新聞雜誌記者に對する好意や、他人の依頼を斷りきれない自分の心弱さなどは、外から自分を動かして、此等の文章を書くための筆を握らせた。併し此等の外面的機縁は自分の文章の内容を規定する力を殆んど全く持つてゐなかつた。自分は此等の外面的社會的の必要に應ずるために、常に内面的衝動の充實を待つてゐた。さうして内面的衝動の充實を待つて始めて筆を執つた。従つて自分は屢々經濟上の窮乏を忍んだり、締切の日に後れて他人に迷惑をかけたなり、口約束ばかりで半年も一年も引張つて置いたりしなければならなかつた。此等の文章は外面的機縁によつて火を導かれたが、外面的動機を以つて爆發したものではない。固より此等の文章は悉く内面に蓄積する心熱の苦しさに推し出されたものだ云ふのは誇張である。併し書くに足る程の内面的成熟を待つて之を記録したと云ふだけの權利は、自分に許されてゐると信じてゐる。自分は此等の文章がまだまだ熱と力に缺けてゐることを熟知してゐる。併し、その時々自分の人格に許された限りの誠實を盡して、此等の文章を書いたと云ふことだけは憚らない。

とは云へ、誠實の深さも亦人格の深さと始終

する。自分は從來に於ける自分の文章を貫く誠實が、甚だ淺く輕いものなことを思ふ時、さうして冷汗の流れることを覺える。回想すれば、事物の真相に透徹せむとする誠實も淺かつた。自分の生活を深く——穿ち行かむとする誠實も亦淺かつた。——從來、自分は比較的論理的客觀的思考の力に富んだ者と、世間から許されてゐるやうな氣がしてゐた。さうして自分も亦深い反省なしに、茫漠として批評價を受納れてゐた。然るに、その實、自分の思想は、現在利那の内面的要求をのみ基礎として、事物の一面にのみ穿貫し行く部分觀に過ぎないものが甚だ多かつた。さうして自分は自分の内面的要求が特にその阻退さるゝ點に於いて燃え立つことを經驗した。従つて自分は常に自分の要求を阻退する一面にのみ極度に強い光を投げて、自然と人生と自己とを觀じて來た。自分の思想は、自然に就いても、自己に就いても、靜かに深い客觀性を缺いた少年の厭世主義が主調をなしてゐた。而も此厭世主義を自己に適用するに當つて、自分は解剖の一面にのみ熱して、開展に向ふ努力の一面を忘れ勝であつた。自分は自分の解剖が穿貫の力を缺いてゐるとは今でも思つてゐない。さうして現在と雖も、實相の凝視、解剖、並びに嫌厭を、無意味にして呪ふ可き事だとは少しも思はない。併し自分の人格は、何と云つても解剖の一面に停滯して、靜かなる包容と、根強き局面開展の力とを缺いて居た。自分は過去の自分を回顧する時、此點に於いて自分が憎

くて恥かしくてたまらない。殊に自分は今自分の内生が徐々として轉向しつゝあることを感じてゐる。従つて過去の自分に對する愛着は、次第に冷淡と憎惡とに變化しつゝあることを感じてゐる。自分は今此變化し行く心を以つて過去の文章を見る。さうして自ら生み、自ら育てて來た此等の小さい者に對して、流石に愛憐の情に堪へない。自分の此書を編輯するころは捨てる子のためにその安息の處を——その墓を準備してやる母親のころである。

併し此の如き未練愛着のころは、舊稿を編輯する理由にはなつても、之を公表する理由にはならない。自分は何の權利があつて、敢て此書を公表するのであるか。自分の信ずる處では、自分は二ヶ條の理由によつて此權利を享受する資格があるやうである。自分は此二ヶ條の理由によつて、此書の出版が現在の思想界に對して多少裨補する處ある可きを信じてゐる。

第一に此書に輯められたる文章には未熟、不徹底、其他あらゆる缺點あるに拘らず、眞理を愛するころと、眞理を愛するがために矛盾缺陷暗黒の一面をもたじろがずに正視せむとする精神とは全篇を一貫して變らないと信ずる。此書の大部分を占めてゐる内容は、自分の矛盾と缺乏とに對する觀照である、従つて自分は此觀照の記録によつて他人のこゝろを溫め清めることが出來るとは思つてゐない。此書は恐らくは讀者を不愉快にし陰氣にする書に相違あるまい。併し自分は自分の文章が徒らに、理由なくして、

他人を不愉快にし陰氣にするとは信じてゐない。讀者が此書によつて陰氣になり不愉快になるならば、それは陰氣になり不愉快になることが、讀者その人の必ず一度は經過しなければならぬ必然だからである。自分はその人を往く可き處に往かしめるために、之を不愉快にし陰氣にすることを恐れない。矛盾を正視すること、矛盾の止を輕易に滑ることとを戒めることは、凡ての人の第一歩に於て正路に就かしめる所以である。若し此書を貫く根本精神が多少なりとも生きてゐるならば、讀者の胸中に矛盾を正視しながら、而も其中に活路を求むるの勇氣を鼓吹する點に於いて、幾分の裨補がない譯はないと思ふ。

第二に此書は單純なる矛盾と暗黒との觀照ではない。同時に暗黒に在つて光明を求める者の叫びである。さうして又、實際、暗黒から少しづつ光明に向つて動きつゝある心の記録でもある。固より自分の心は魔障の多い心である。自分には、僅に一步を進めるためにも、猶餘かなければならぬ千の障礙がある。自分は千鈞の魔障を後にひいて、人生の道を牛歩する下根の者である。此六年の日子を費して自分の歩いた道は恐らくは一寸にも當らないであらう。併し、兎に角に、自分の内生は此間に多少の開展を経て來た。自分は道草を喰ひながら、どうも廻りながら、迷ひながら、躓きながら、どうかして此處まで歩いて來た。その間の勞苦は、自分にとつて決して小さいものではなかつた。假令個々の部分を形成する思想内容には見るに

足るものが極めて少いはしても、此小なる開展の跡を貫く微かなる必然は、神と人との前に全然無意義なものではあるまい。自分が此書を編むに際して經驗する心持は、必ずしも羞恥の情のみではないのである。

自分は此小さい經驗の報告が、それ／＼の道を進みつゝある現代の諸友に、多少なりとも參考になるやうにと切望してゐる。自分は過去に對する未練と愛着とによつて此書を編んだ。願くは之が同時に、現在並に將來の思想界を幾分なりとも裨補するの書ともならむことを。

大正三年二月十一日

谷中の寓居にて

阿部次郎

斷片

青田三太郎は机の上に頰杖をついて二時間許り外を眺めてゐた。さうして思出した様に机の抽斗の奥を探つて三年振に其日記を取出した。三太郎の心持が水の上に滴した石油の様に散つて了つて、俺はかう考へてゐる、俺はかう感じてゐると云ふ言葉さへ、素朴なる確信の響を傳へ得ぬ様になつてからもう三年になる。彼は其間、書くとは内にあるものを外に出すことに非ずして、寧ろペンと紙との相談づくで空しき姿を隨處に製造することだと考へて來た。日記の

上をサラ／＼と走るベンのあとから、「嘘吐け、嘘吐け」と云ふ囁が雀を追ふ鷹の様に羽音をさせて追掛けて来るのを覺えた。三太郎は其聲の道理千萬なのが堪らなかつた。解らぬのを本體とする現在の心持を、纏つた姿あるが如くに日記帳の上に捏造して、暗中に摸索する自己を訛傳する、後日の證據を残す様なことは、ふつたり思ひ切らうと決心した。さうして三年の間雲の如く變幻浮動する心の姿を眺め暮した。併し三年の後にも三太郎の心は寂しく空しかつた。この空しく寂しい心は彼を驅つて又古い日記帳を取出させた。とりとめのない此頃の心持をせめては罫の細かな洋紙の上に寫し出して、半は製造し半は解剖して見たならば、少しは世界がはつきりして來はしまいかと、果敢ない望が不圖胸の上に影を差したのである。日記帳の傍には三年前のインキの痕を秩序もなく残した白い吸取紙が、春の日の薄明りに稍々卵色を帯びて見えてゐる。三太郎は碁盤に割つた細かな罫の上に、細く小さくペンを走らせて行く。

「生活は生活を咬み、生命は生命を蝕ふ。俺の生活は湯の煮えたぎる鐵瓶の蓋の上に、あるかなきかに積る塵埃である。其底に生命が充溢し、狂熱が沸騰してゐると云ふ意味ではない。俺の心は唯常に動搖してゐる。動搖を豫期する念々の不安は現在の靜安をも徒に脅迫してゐる。一皮を剝いた下には赤く爛れた様々の心が、終夜の宴の終局を告ぐる疲れたる亂舞に狂ひ回つてゐる。重ねて云へば、俺の生活は芝居の波であ

る。波の底には離れ離れになつた心が、下廻りらしい乏しさを以つて、目的もなく唯藻掻いてゐる。この動亂こそ我が生存の唯一の徴候である。其處には純一なる生命もなく、一貫せる主義もなく、従つて又眞の生活もない。俺の生活は既に失はれた。俺は今眼を失へるフォルキユスの娘達の様に、黄昏れる荒野の中に自らの眼球を捜し廻つてゐる。

俺は古の心美しき人達の歌に聲を合せる——俺にも昔は眞正の生活があつた。幼き日は全心に沁み渡る恐怖と悲哀と寂寞と、歡喜と爭心と親愛との間に過ぎた。俺は子供として又人として、無花果の嫩葉が延びる様に純一無雜に生きて來た。俺の心は一方にスクスクと延びて行く命であつた。一方には又靜かに爽かなる鏡であつた。命が傷ついて鏡が曇つて、茲に動亂を本體とする現在が来る。明日になつては命が枯れるか鏡が碎けるか、現在の俺には何事も解らない。唯俺には満足し得ざる現在がある、現在に満足せざる焦燥がある。

尤も、猥雜によつて心の命を傷つけらる可き俺の運命は早くも幼年時代に萌してゐた。俺の幼い心には後年の教育と經驗とによりて蹂躪せらる可き空想の世界が早くより其種を卸してゐた。俺は羅馬舊教の傳説中に養はれ祖母に育てられて、北國の山村に成長した。山村の夜はとりわけ寂しく靜かであつた。此寂しく靜かなる山村の夜々に、桃太郎カチカチ山の昔噺と共に俺の心に吹込まれたるものは、天國煉獄地獄の

話であつた。俺は幼心に自らの未來を推想して、到底直ちに天國に登るを許さる可き善人だとは自信し得なかつた。俺は地獄と煉獄との間に懸る自分の魂に、成年の感じ得ざる新鮮なる恐怖を感じてゐた。特に最も氣懸りなのは、煉獄の長い修練により、罪の淨めも了へて天國に送られる際に、苛責の血に汚れたる手足を洗ふ可き水の流の有無であつた。俺は夜中に眼を醒して此事を思出すと堪らなかつた。さうして傍に眠つてゐる祖母を揺起しては、よく泣き乍ら此問題の解答を求めたものであつた。死の恐怖と死後の想像とは幼年時代から少年時代にかけて久しく俺の生活の寂しく暗い一面を塗つてゐた。思出すは十一二の時分に遭遇した大地震である。俺は母や弟妹と共に裂けて外れた雨戸から外に這出した。時は雨が上つて空がまだ曇つてゐる秋の夕暮であつた。素足に踏む土は冷く、又ジメジメしてゐた。火を失したのであらう、遠くの村々の焼ける炎は曇つた空に物凄く映つた。大地の底は沸騰した大釜の様にゴーゴー唸つてゐた。さうして湯氣を噴出する口を求めて釜の蓋をゆるがす様に、數分の間を置いては大地を震はしてゐた。俺は此の中に立つて、今軒々と胸にこたへる死の恐怖に比すれば、平日の念頭に上る死の壓迫などは丸で比較にならぬと思つたことを記憶してゐる。此の如き反省が直ちに念頭に上る迄に、死は當時の自分を威嚇してゐたのである——併し心の生命が傷つくと共に死の恐怖も亦其新鮮なる姿を失つた。俺は今死を

恐れない、少くとも死の恐怖が現在の俺を支配してゐない。今の若さで、それ程迄に俺の生色は極めて了つた。それ程迄に俺の心は疲れ萎びて了つた。

兎に角羅馬舊教の世界は、周囲の雰圍氣によつて養成された自分の世界に、兩立し難き異彩を點綴したる最初であつた。爾來幾多の世界は別々の戸口を通して俺の頭腦の中に侵入して來た。其或者は俺の心に作用して從來知らざりし歡喜と悲哀とを教へた。其或者は俺の理解を強制して瘤の如く俺の頭の一角に固着した。此等の種々の世界は俺の心の中で、俺の頭の中で、若しくは俺の心と俺の頭とに相對峙して、相互の霸權を争つてゐる。俺の生命は多岐に疲れて漸く其純一を失つて來た。過度の包攝は俺の心の生命を傷つけた。

俺の心の世界では一つの表象が他の無數の表象を伴ひ、一つの形象が他の無數の形象を伴つて來る。無數の表象と無數の形象とは相互に喧嘩口論をし乍らも、其手だけは源氏の白旗を握る小萬の手の如く緊乎と握り合ひつゝ、座頭の行列の様に參ましくおどけ乍ら無限に心の眼の前を通つて行く。一つの表象が中心となり、一つの形象が焦點となつて、他の意識内容に皆情調の姿に於いて其背景を彩るのならば何の論もない。凡てが表象と形象との姿を現はして中心を争ふが故に、俺の心の世界には精神集注 Konzentration と云ふ跪拜に價する恩寵が天降らない。俺の意識は唯増もなく動亂するのみである。俺の An Sich は苦しい夢の見通しである。

今あることとなければならぬこと、現に實現せられたること、實現を求むる力として現實の上に壓迫して來ること——約言すれば現實と理想との矛盾は、恐らくは精神と云ふ精神の必ず脱る可からざる状態であらう。此矛盾は健全なる自遜と努力とに導くのみであつて、何の悲觀する必要もない。併し俺の意識の中では現實と現實と、理想と理想とが相食んでゐる。様

様の心持が海の怪の様に意識の中に戯れて、現に頭を擡げてゐる一怪を認めて俺の現實を代表させ様とすれば、それぢやア駄目だよと云つて思ひがけぬ處に他の一怪が頭を波の上に突き出す。午後の日が彼等の長い髪の上にきらめいて、波が怪しい波紋を織り出してゐる。其上に一つの理想は西から吹いて西から波濤を起して來る。一つの理想は北から吹いて北から波濤を起して來る。心の海は今自らの姿に驚き呆れてゐる。

此の如くにして、内界が分裂すると共に更に不思議なる現象が現はれて來た。俺は自らあることに満足が出来なくなつた。現にあることとあるを迫ることの孰れをも含んで、兎に角自らあることに満足が出来なくなつた。俺は飢ゑたる者の如くに自ら知ることを求める様になつた。自らあることと自ら知ること——「ヘーゲルの言葉藉りて云へば An Sich (本然?) と Für Sich (自覺?) とである。ヘーゲルの意味と俺の意味と全然相蓋うてゐぬことは云ふ迄

もない。先人の用語は唯俺に都合のよい内容を盛る爲の容れ物に過ぎない」——の對照は實に不思議なる宇宙の謎語である。自らあることは自ら知ると共に自らあることの内容を變更して來る。強き者は自らを強しと知ると共に多く驕傲と云ふ内容を得易い。單に強くありし者は其自覺と共に強く且つ驕れる者となつた。弱き者は自らを弱しと知ると共に謙遜と焦躁と努力との内容を得來る。單に弱きのみなりし者は弱きが爲に謙遜し焦躁し努力する者となつた。若し是が、自ら知ると共に自らあることも亦複雜になり豊富になるに止まらざるならば固より論は無い。併し疑ふらくは、自ら知ると共に自らあることの純一に強盛に素樸に發動することを妨げると云ふ一般の傾向を持つてゐるらしい。若しくは自らあることの爛熟と頽廢との隨伴現象として來ると云ふ一般的傾向を持つてゐるらしい。ヘーゲルは「ミネルヴの梟は夕暮に飛ぶ」と云つたと聞く。Für Sich は An Sich を蠶食し陥没せしむるものと云ふことが事實ならば、而して此事實を評價する者が、俺の様に An Sich の純粹と集中と無意識とを崇拜する者ならば、其者の哲學は遂に Peinismus ならざるを得まい。少くとも自覺と本然との矛盾に就いて深き悲哀なきを得まい。俺には此點に就いて大なる疑問がある。俺の心が此疑問の生きたる Illustration であらう。

併し自覺と本然との一般的關係はどうでもよい。兎に角 An Sich が生命の純一を失つて徒

に動亂する魂なりとすれば、此魂の自覺は益々其悲哀を深くし、其矛盾を細密の點まで波及せしめ、其散漫を二重に三重に散漫にして、到底手も足も出し得ない者にする傾向あることは争ふを許さぬ。Erich Sied は動亂する本然の情態を靜かなる知慧の鏡に映して觀照 Anschauen を樂とする譯に行かない。俺の心は慟哭せむが爲に鏡に向ふ果である。鏡中の姿を怖るゝが故に、再度三度重ねて鏡を手にする果である。反省も批評も自覺も凡て病である。中毒である。Snacht である。

散漫、不純、放蕩、薄弱、顛倒、狂亂、痴呆——其他總ての惡名は皆俺の異名である。従つて俺は地獄に在つて天國を望む者の憧憬を以つて蕪雜と純潔と貞操と本能とを崇拜する。嗚呼俺は男と大人との名に疲れた。女になりたい、子供になりたい、兎に角俺は俺でないものになりたい——。

併し此の如く生活を支へる者の歌、失へる生活を支へる者の歌を聲高らかに歌ふことは餘りに俺の身分に相應しくない。嚴密の意味に於いて云へば、俺は失へる生活を支へる心さへ既に失つてゐる。俺は心から求めたことがない男である。求めよ然らば與へられむと云ふ言葉の眞偽を實際に試したことのない男である。素直にして殊勝なるロマンティケルは何時の間にか其姿を晦ました。フォルキユスの娘は今も猶隠れん坊の對手を捜す様に、其眼球を荒野の黄昏に捜し廻つてゐる。恐らく彼女は永久に眼球探し

の遊戲をやめないであらう。處は荒野である。時は黄昏である。身は失明者である。捜されるものは失はれたる生活である。又何の缺けたることがあらう。

彼女の眞實に求むる處は唯此暗く悲しい氣分である。」

三太郎は此迄書いて來て急に筆をすてた。さうして憎さげに野の細かな洋紙の上に「瞥を投げた。」「嘔吐け、嘔吐け」と云ふ騒音が三年前と同じく、サラサラと走るベンのとから、雀を追ふ鷹の様に羽音をさせて追掛けて來た。三太郎は又ベンをとつて別の頁をあけた。

「俺の心の海にはまだまだ俺の知らぬ怪物が潜んでゐるらしい。俺の An Sich はまだ本當に Erich Sied になつて居ない。俺は女のような物云ひをした。俺はあつて欲しいことを皆否定の方に誇張してゐる。俺は人生に向つていやですと云つてゐるのである。

兎に角、日記は矢張り書く可からざるものであつた。書くこと云ふことは An Sich が生きて働くこと云ふことではなかつた。Erich Sied の鏡をキラキラと磨くと云ふことでもなかつた。唯指の先に涎をつけて、心の隅に積つた塵の上に、へへのもへじを書くことに過ぎなかつた。

結論は俺には何もわからないと云ふことである。」

かう書いて三太郎は、日記帳を再び抽斗の奥に投げ込んだ。さうして何時の間にか點いてゐる電燈を仰いで薄笑をした。遠くの方から蛙の聲が聞えて來る。

(明治四十五年四月二十三日夜)

三太郎の日記

一 痴者の歌

1

世の中に出来ない相談と云ふ事がある。到底如何にもすることが出来ぬと頭では承知し乍ら、情に於いて之を思ひ切るに忍びぬ未練がある場合に、人は自分の前に突立つ冷かな鐵の壁に向つて出来ない相談を持掛け勝なものである。出来ない相談を持掛ける心持は「痴」の一字で盡されてゐる程果敢ないものに違ひない。十年壁に面して涙を滾してゐた處で冷かな壁は一步でも道を開いて呉れ相にもない。實功の方面から云へば出来ない相談は無用なる精力の徒費である。唯出来ない相談を持掛けずに済む心と之を持掛けずにはゐられぬ心との間には拒む可からざる人格の相違がある。

實現を斷念した悲しき人格の發表——此處に「痴」の趣がある。痴人でなければ知らぬ黄昏の天地がある。

2

我等には未來に對する樂しき希望がある。併し我等にはまた取返さねば立つてもゐても堪らぬ程の口惜しい過去もないことはない。過去の因果が現在の心持にだにの様に食ひ込んで離れぬ場合も亦多からう。併し夢を食ふ猿でも過去を一紙にして消して呉れる力があらう筈もない過去に向けられたる希望は凡て痴である。出来ない相談である。二十になつて漸く戀の心を悟つた藝者が、何も知らずに一本にして貰つた昔の事を考へて、取返しのかぬ口惜しさに頬にかゝる後れ毛を噛み切つても、返らぬ昔は返らぬ昔である。血の涙でも昔を洗ひ去る譯に行かない。唯出来ない相談と知り乍ら又しても、之を持掛けずにはゐられぬ心が誠の戀を知る證にはなるのである。併し假令誠の戀を知る證は立つても、一旦受けた身と心とのしみは自然の世界では永恆にとれる期があるまい。焼け跡の灰は家にならない。焼け跡の灰は痴者の歌である。

3

自覺とは、因果の連鎖の中にある一つの環が自ら第幾番目の環に當るかを悟ることである。自覺をしても因果の連鎖は切れない。因果を超越するものは唯「新生」である。嗚呼併し自然の世界の何處に新生があるか。新生とは限りなくつつかしく、限りなく恐ろしい言葉である。

4

因果の連鎖を辿り行く儘に吾人の世界には新しい眼界も開けよう。新しい歌も生れよう。併し其世界と其歌とには常に死靈の影が附纏つてゐる。天真とも離れ過去の渾然たる文明とも離れた吾人の世界は「新生の歌」が響くには餘りに微臭い。自分はせめて痴者の歌をきいて涙を流したいと思ふ。(明治四十四年八月十四日)

二 ヘルメノフの言葉

1

余は獨立の人格である。故に余は獨自の思想を持つ。但し獨自の思想を持つとは其結合の狀態、統一の方法が獨自の面目を露呈するの意味であつて、其要素が悉く獨得であると云ふ意味ではない。要素に於て悉く獨得なるは狂者の思想である。他人と全然交渉なき怪物である。要素に於いて共通にして結合に於て獨自なればこそ余は友を持ち戀人を持つ。同時に余は余として人生の大道を行く。

余が獨自の思想を組織する要素は、一面には現代の徒と共通である。一面には現代の徒と背いて古代の詩人哲學者と交感する。一面には現代と古代と共に超脱して獨得の閱歷に其根柢を置く。余は獨自の思想を許りて苟くも安きを求むるの惡漢ではない。羊の皮を着て群羊の甘心

を買ふの奸物ではない。余は獨自の思想を有する事を標榜して憚らず人生の大道を行く。

余は憚らず人生の大道を行く。併し余は余が思想人格の全部を白日の下に晒して大道を開歩することを恐れる。余は現代と矛盾する思想を發表するには細心なる辯解を附して前後左右を護衛する。重大なる損失を齎すべき思想は暫く裏んで之を胸裡に藏する。汝怯者よ、汝覆面して人生の大道を行く者よ。

余の知慧は二重の組織より成る。内面の生活を蒸餾して其精髓を蓄へるは一つの知慧である。此知慧を警護して蛇の如く伶しく外界との調和を計るは今一つの知慧である。自分には此第二の知慧が苦々しい。第二の知慧は第一の知慧を保護すると共に又之を蒼白にする。小兒の如く無邪氣に、白痴の如く無選擇に、第一の知慧を放ちて世界を開歩せしむる能はざるは、我が性格の弱きが故か、我が呼吸する零圍氣の鉛の如く重きが故か。嗚呼我が魂よ、コポルトの如く躍れ跳れ。

2

赤兒を豺狼の群に投ずるは愚人の事である。

汝の右と汝の左とには汝よりも遙かに巧に自ら守る人多きを見よ、汝の蛇の知慧は寧ろ少きに過ぎると一つの聲は云ふ。汝は汝の所持する物を公表するに時の利害を考量するに過ぎぬ。持たざるを持てりとし、持てるを持たずとする虚偽に比すれば遙かに上品ぢやないかと今一つの

聲が慰める。併し此二つの聲は世間に對する申譯の言葉とはなつても、自分に對する申譯とはならない、苟も蛇の言葉を解することが余には堪へ難く苦々しいのである。

強者は自己の思想を外界に徹底せむが爲に發表の順序を考慮する。弱者は外界の壓迫を避けて靜に獨り往かむが爲に世間の鼻息を窺ふ。

3

自分にとつて興味ある對話の題目は唯自己と自己に屬するものである。併し此題目は他人にとつて死ぬ程退屈なものであらう。又他人にとつて興味ある對話の題目は唯其人と其人に屬するもののみである。併し他人にとつて興味ある對話は自分にとつて死ぬ程退屈なことである。故に吾人が他人と對話して非常に面白かつた場合には、自分の對手に與へた印象は甚だ悪かつたものと覺悟せねばならぬ、又對手に與へる印象をよくする爲には吾人は非常な退屈を忍ばねばならぬ。兩者半々ならば其人の経験は甚だ幸福なる経験である……。

レオバルヂは覺え帳にかう云ふ意味の言葉を書いた。此言葉を書いた時レオバルヂの唇には苦い、淋しい微笑が浮んだであらう。この苦い、淋しい微笑が此の如き蛇の言葉の生命である。處世の哲學を説く商業道德の講師の様に、ニコリともせず此の如き言葉を發する者は一面に於て卑俗である。一面に於て痴愚である。

薄明(Dämmerung)が事物を美化することは屢々云はれた。此事は其自身に美しい事物に關しては適用することが出来ない。印象派の畫家は強烈なる光の戯れを愛するが故に白日を擇ぶ。自然の風光は白日も美しく薄明も亦美しい。薄明は唯其自身に醜いものを美化する。薄明の美化は自然よりも寧ろ人生のことである。

自分の世界は呪はれたる世界である。我が意識の外に切り捨て、忘れ去り、葬り終るに非ざれば心の平安を保持し難き事柄が少からず眼前にウヨ／＼してゐる。従つて我が心には抽象(Abstraktion)の願切ならざるを得ぬ。抽象の願切なる限り、醜き物、厭はしき物、煩しき物に弱き光を與へて、之を意識の微かなる邊に移して呉れる朦朧は嬉しい光である。

更に薄明は我が想像に活動の餘地、添補の餘地を與へる。余は朦朧なる事物を余自身に價值あるものとして創造する。此創造によりて事物の本質(Kwesen)が浮んで來るか否かは明白でない。唯余自身の本質が薄明に乗じて對象に乗り移るの事實は疑はれぬ。従つて如何なる事物にも、一定の光の下には美しく見ゆべき條件が潜んでゐることも亦爭はれぬ。抽象の意義は唯本質の榮えむが爲に雜草を刈り去る處にある。本質を逸したる抽象は無意義である。

闇中に見る女の眼は凡て大きく潤を帯びて見える。此大きく潤のある眼を通じて想像の手を

女の肌に觸れる時、女の肉體は凡て美しい。後姿の美しい女は其後姿が自分にとつては女の本質である。

嗚呼併し明るみの中に見むと欲するやみ難き要求よ。明るみの光に消え行く幻の悲哀よ。此悲哀に促されて更に辿り行く人生の薄明よ。

5

自分は未だインスピレーションと云ふものを知らない。併し今まで散ばつてゐた思想が次第に纏つて、水面に散點してゐた塵埃の渦巻に近づくに従つて漸く密集し、歩調を整へて旋轉するが如き利那の経験は決してないことはない。思惟の脈搏が歩一步に高まり、心のテンポが漸次に快速となるにつれて、肉體の上にも顔面の充血が感ぜられる。未だ鏡に向つて検査する機會を持たないが恐らくは眼も潤ひ且つ輝いてゐよう。此時自分の心はムツ痒いやうな苦しいやうな快感を覺える。

此狀態は何時襲來すると極つてゐない。併し多くは讀書の後、安眠の後の散歩中に来る。自分は思想の湧く閑散歩をつづける。さうして前に湧いた思想が後に湧く思想に壓されて記憶の外に逸せむとする頃、急いで家に歸つて紙に向ふ。併し紙に向ふ迄には散佚して引汐の様にひいて了ふ場合が多い。結論は形骸を頭の中にとどめても新生の熱は冷灰となつて了ふ。偶々寫しとゞめても讀み返して見れば下らぬことが多い。

自分が経験する思想の益湧は、一尺ほれば湧いて来る雑水の様なものであらう。深く鑿つて清冽なる純水に達する時の心持は自分にはわからない。併し湧き出るものは雑水で使用するに堪へずとも、兎に角益湧の快感と苦痛とだけは知つてゐる。

6

夕焼の空が河を染めてゐる。河沿の途を大人と子供とが行く。「もう歸らうぢやありませんか」と手をひいてゐる女が云ふ。「いや、もつと行かうよ」と手をひかれてゐる子供が云ふ。疲れた親は活力に溢れた子供のアスピレーションに水をさす。活力に任する子供は疲れた親に同行を強ひる。親と子とが自然の愛によつて結合されたるはお互の因果である。親の手に纏る事なしに、河沿の途を遠く／＼行く術を知らぬ子供のアスピレーションは運命の反語である。夕焼の光は次第に消える。河筋は遠く白く闇の中に浮んで見える。河の面に霧が深くなる。

(四四、一一、二〇)

三 心の影

1

價值ある情調を伴つてこそ知識も、思想も、乃至情緒其物も始めて身に沁みる経験となる。全心の共鳴を惹起することもなく、數知れぬ倍音

と融け合つて根強い響を發することもなく、離れて鳴り離れて消ゆる思想や知識は餘りに乾枯びて、餘りに貧しい。明るみに輝く焦點の後には、暗きに隠れ、薄明の中に見え隠れする背景がなければならぬ。一度鳴れば心の世界の隅々に反響を起して、消えての後も意識の底の國に餘韻永く響く様な知識と思想と情緒とが欲しい。一言にして盡せば心の世界に靈活なるシンボリズムの流通を感じる生活がしたい。

併し情調の生活は往々にして思想と人格とを拒むの生活となる。現實の生活が餘りに複雑にして思想の單純に括り難いことを知るからである。自我の發動が餘りに移り氣に、變幻多様を極めて人格の不易に綜合し難いことを知るからである。昨日は何處に彷徨つてゐたやら、明日は如何なる國に漂ひ着くやら、此等は凡て知るを要せぬ、且知ることを得ぬ問題である。唯瞳を焼くが如く明かなるは現在の生活と其情調とである。其時々情調を噛みしめて、其時々共鳴を樂んで行くより外に吾人の生きる道がない。吾人の生活は利那から利那へとば／＼と漂ひ流れて行く。

此の如く永久に利那々々の情調を追つて行くのがロマンチズムならば世にロマンチズム程淋しいものはあるまい。情調の放蕩の外に此世に生きる道がないとしたら他人は知らず自分は耐れない。「昨日」に對する不信の意識も淋しく、「明日」に對する不安の意識も亦淋しい。依つて立ち依つて安んずるに足る可きもの、若

しくは包んで温めて呉れるものがなかつたら自分の心は永久に不満である。自分の心の空は永久に曇天である。我心は漂泊し放蕩する情調を括る不易の或物に向つて喘いでゐる。之に觸れば複雑にして移り氣な自我の全體が自然に響き出し躍り出す様な一つのキイノートに向つて喘いでゐる。嗚呼我が知らざる「我」は何處の空に彷徨つてゐることであらう。

聖オーガスチンは神の中に憩ふに非ざれば平安あることなしと云つた。自分は要求の點に於て未だ中世に彷徨つてゐる男であらう。思想が欲しい。人格が欲しい。「神」が欲しい。

2

要求を現實に化する根強い力を持つてゐる人にとつては或時を劃して天地が引繰返るに違ひない。或時期を境界として其生涯が著しい二つの色に染分られるに違ひない。併しノラと共に奇蹟を信ずることが出来なくなつた吾人にとつては、精神の如何なる昂揚もやがては引き去る可き満潮である。高潮に乗じて歡呼し熱狂する自我の背後には、冷かに檢溫器の水銀を眺めてゐる第二の自我がある。「我身を共に襠の引き纏ひ寄せとんと寝て抱付締寄せ」泣いてゐる美しい夕霧の後には、皺くちやな人形遣の手がまざまざと見えてゐる。此の如き二重意識の呪を受けた者の世界は光も闇である。狂熱も嘲笑である。悲壯も滑稽である。要するに一切がフモールである。

此フモールの世界に安住して、目新しいフモールの發見に得意になつてゐられる人は幸福である。自分には其背後に奇蹟の要求が覗いてゐる。其笑には「現象の悲哀」が籠らぬ譯に行かない。

3

一つの感情が旋律^{メロディ}をなして流れて行く文藝は固より美しいに違ひない。併し二重意識の洗禮を受けたる吾人は、様々の感情が即いたり離れたり調和したり反照したりしながら複雑な和聲を拵へて行く文藝でなければ物起りない。抽象的な調和統一は如何でも構はぬ。多量のデイツソナンスを交へた處に微妙なる情調の統一を保つて行けばそれでよいのである。自分一個の嗜好から云へば眞面目と巫山戯との中が割れて兩者が綯ひ交られて行く處に妙に遺瀾ない情調を喚起する、フモリスチッシュの作品は随分好きである。心の傷に手を觸れて身にこたへる苦しさを楽しもうとする類であらう。

嘗て富士松加賀太夫の膝栗毛市子の段を聴いた。洒落と浮氣で世を渡る彌次郎兵衛が其洒落と浮氣で持切れなくなつて、悄氣で弱つて本氣になる所に、しんみりした、悲しい、遺瀾ないフモールがあつた。又嘗て菊五郎の同じ膝栗毛赤飯の段を見た。併し其彌次郎兵衛は冥土の衛に彷徨つて、弱り切つて、本氣になつた彌次郎兵衛ではなかつた。踊り自慢の悪戯小僧が白張の提灯を被つて巫山戯てゐるとしか思はれなかつた。

つた。此場合に於いてフモールの印象を與へるに與へぬとは作の本質を捉へると捉へざるとの相違である。自分は菊五郎を有望だと思ふ丈に、其現在の傾向を追うて慢心することを恐れる。菊五郎は一轉化しなければ唯鼻ツぱしの強い親分と、一通りの單純な滑稽の役者に過ぎない。悲壯と崇高とフモールとの役者になる爲にはもつともつと心の苦勞を積まねばならぬ。悲壯と崇高とフモールとを表現するに堪へざる俳優は吾人にとつて用のない俳優である。

(四四、一二、三〇)

四 人生と抽象

1

普通の解釋に従へば抽象とは具象の正反對である。抽象する作用は常に事物の具象性を破壊し、抽象せられたるものは既に具象性を失つてゐるのである。併し自分の考は少しく普通の解釋と違つてゐる。自分の解釋が正しいならば、具象性を破壊するものは抽象作用^{抽象作用}其ものに非ずして抽象の方法である。従つて具象性を破壊する抽象もあれば、具象性の印象を一層明確深遠にする抽象もある。

若し事實と云ひ具象と云ふことが吾人の感官を刺戟する猥雜なる外界の一切を意味するものとすれば、彼の現實乃至具象の世界は既に吾人の知覺をすら逸してゐる。況して吾人の悟性乃

至理性に映ずる世界の姿が此種の現實を離れ、具象性を失つてゐることは云ふ迄もない事柄である。知覺は無意識的に外來の刺戟を選択する。更に悟性と理性とは經驗の價值と意義と強度とによりて知覺の世界に選擇を施す。選擇するとは或種の經驗を強調して或種の經驗を捨棄することである。抽象作用を度外視して世界を認識することは徹頭徹尾不可能である。従つて現實の世界具象の世界は抽象作用を俟つて始めて吾人の頭腦中に成立するのである。世に抽象的に非ざる具象界は存在し得ない。具象の世界は抽象作用の子である。現實の世界は吾人の創造する處である。

吾人が猥雜なる外來の刺戟中より現實の世界を創造するに當りて、渾沌を剖判す可き重要な原理となるものは、強調せられ若しくは捨棄せらる可き經驗の意義である。而して經驗の意義を決定するにはリッブスも説けるが如く二様の要素がある、一つは經驗そのものが意識に對して有する壓力である。強度である。一つは其經驗と吾人の要求との適合不適合の呼吸である。狹義に於ける其經驗の價值である。若し此兩面が美しい調和と平衡とを保つならば其強度と壓力によりて吾人の世界に一定の地位を要請する經驗は、隠れたる自我の要求と何等の闘争なくして其要請する地位を占有することが出来、又自我の要求によりて強調せられ若しくは捨棄せらる可き經驗は、知覺の側より何等の顯著なる抗議を受けることなくして其抑揚を完くすること

が出來て、吾人は素朴無邪氣に古典主義の世界に優游するを得る譯である。併し吾人の世界に在つて古典主義は遠き世の破れたる夢となつた。破れたる夢を慕ひて新しき世に其復活を圖らむとする新古典主義はあつても、昔ながらに素朴無邪氣なる古典主義の姿は今の世の何處にも發見することを得ないであらう。少なくとも自分一己の世界に在りては、知覺の世界に於いて一定の強度と壓力とを有する經驗に對して、隠れたる自我の要求は我が求むる處は此の如く醜き者に非ずと顔を背ける。自我の要求より出發する經驗の抑揚に對して、知覺の世界は現實を離れたる白日の夢よと嘲弄する。要求の眼より見れば知覺の世界は姿醜く、品卑しく、碎け且つ歪んでゐる。知覺の世界に立脚すれば要求の世界は實相を離れたる空しき紙の花に過ぎない。茲に至りて始めて現實と理想とは主義として闘争し、具象と抽象とは兩立し難き極端となつて、抽象作用は意識的に非ざれば行はれ難い事となるのである。捨象とは拒斥である、放逐である。一面に、焦躁する自我は眼を瞞らし肩を聳かして醜き知識を擯出する。一面に、捨象せられたる經驗は怨靈となりて新しき世界の四周を脅迫する。此の故に吾人の世界は第一に知覺と要求との兩端に分裂し、第二に不安にして強制の陰影を残し、第三に稀薄にして本能の強健を缺くのである。

併し吾人の意識に内界統一の願望ある限り、吾人は依然として抽象の歩を進めなければなら

ぬ。經驗に抑揚を附して人生の精髓を選擇しなければならぬ。貧弱なる文明の遺産を繼承し、不統一なる知覺の世界に生れたるだけに、慙々切に抽象の歩を進めなければならぬ。明治の日本に生れ合せてる吾人は大向うから人生の芝居を覗く連中である。前面にウヨウヨする無數の頭顱と、前後左右に雜談する熊公八公の徒と、場内の空氣を限る鐵の格子とを抽象して、せめて頭腦の世界に於いて棧敷の客とならなければならぬ。吾人の抽象に反抗と感傷との具あるはやむを得ない。兎に角に予は抽象の生活を愛する。

抽象は超脱となり、超脱は包容となる。予と雖も之を知らざるものではない。併し此不統一なる世界に生れて、誰か自ら詐ることなくして包容の哲學を説くを得よう。予は抽象の低き階級に彷徨する。故に予は抽象の哲學を説く。

2

前段の論理を摘要し添補する。

具象とは五官よりする印象を、如實に遺漏なく保存するの意ならば、人間の世界には何處にも具象と云ふものはない。若し具象とは經驗の意義、本質、價值を掲げ出すの義ならば、内的要求より出發するの抽象は慙々具象性を強烈にするの作用である。眞正の具象性は抽象の成果として到達せらる可き状態である。

第二の意味に於ける具象の概念は經驗の本質を掲揚し保存することを精髓とする。經驗の意

義を捨象する作用が即ち具象性を破壊するの抽象である。抽象が具象性を破壊するには二様の途がある。第一は經驗の内容を捨象して其形式のみを保存するのである。第二は猥雜なる官能的刺戟に執着して經驗の意義本質を逸するのである。感覺的現實を偏重する者は形式的普遍のみを求むる者と同樣に抽象的である。具象性を破壊する惡抽象たるに於いて兩者の間に二致がない。

事件や行動の報告よりは情調情緒の報告の方が更に具象的な場合がある。情緒情調の報告よりは思想の報告の方が更に具象的な場合がある。事件や行動の報告に非ざれば、事件や行動の報告を通じて思想感情を暗示するに非ざれば、具象的でない様に考へるのは反省を缺ける淺薄なる思想である。

併し事件行動の如き知覺的具象と、思想感情の如き抽象を経たる具象との間には顯著なる一つの差別がある。それは後者が同様の經驗を経て同様の抽象を試みたる者に非ざれば通ぜざることである。思想感情の直寫は同類の間にのみ通ずる貴族的隱語である。思想感情の傳達を欲して事件行動の報告を欲せざる者の爲に存在する神祕的記號である。余は他人に煩はされずして靜に自己の生活を經營することを欲するが故に、自己の生活を公衆の前に隠す抽象的言語を愛する。

但し茲に云ふ抽象とは知覺の世界に就いて順當に其意義本領を強調し、其偶然を刈除し行く